【学校向け・地域向け】【協力・実践形態：長期・単発】【本会ホームページへの掲載：あり・なし】

困っている人にほんの少しの勇気を

今井　光子　　【推進員認定期】第８期
【所属】視覚障がい者サークル「いどばた」「アイの会」（視覚障がい者）【活動エリア】熊谷市を中心とした県域

学習対象者	□小学生　■中学生（１年生）　□高校生　□住民　□その他（　　）
内　　容	■障がい理解（車いす体験、アイマスク体験、障がい者と交流、施設体験、その他（講話、視覚障がい体験（日常生活の理解） □高齢者理解（高齢者疑似体験、高齢者と交流、施設体験、その他（　　） □その他の理解（　　）
所用時間	１回あたりの時数：５０分
ねらい	・視覚障がい者がどのように日常生活を送っているか、話や体験を通して感じてもらう。 ・障がい者にまちで出会ったら、さりげなくお手伝いができるきっかけづくりをする。

はじめに

私は視覚障がい者である。子育て中に視力が落ち始め、だんだん見えなくなった。４年前に自ら研修受講を希望し、推進員となった。

学校への福祉教育は、所属団体メンバーとして関わることはあったが、推進員個人として、地元の学校と関わるのは昨年のこの実践が初めてである。今まで市社協へアピールし続け、やっと市社協からの依頼に結びついたものである。

実践内容

※１年生全員で体育館で行った。中学１年生ということで、「発達段階は小学生の延長」という教師の助言があり、会場内はなるべく移動しないプログラムとした。

【１．講話】

（１）　視覚障がいとは

・五感のうち、残っている四感をフルに使う大切さ。

・「私に周りの状況を教えてください」→生徒に言葉で実際に伝えてもらう→言葉の大切さ。

（２）　体験談

・工事中の信号機交差点での失敗談。自販機の失敗談→困っている人を見かけたら声をかけてほしい。

（３）便利グッズの紹介
・同じ形の調味料入れの区別の工夫→片方に輪ゴムをつける
・音声時計、音声タイマー、二人用傘、盲人用卓球ラケットとボール、電子レンジの魚焼きシート

【２．アイマスク体験】
・体育館座りをしながら、アイマスクがある子はつけ、ない子は目をつぶり下を向く。
・タンバリンを鳴らし、何の音が当てる。
・四方から切ったレモンを先生方にしぼってもらい、うちわであおいでもらい、何を感じるか答えてもらう（風とにおいを感じてほしい。同時に味覚（すっぱい）もにおいの刺激につられて感じられるとよい）

ここがポイント！

【講話について】
○まちで困っている人（障がいに関わらず）を見かけたら、勇気をもって声をかけてほしいということを強調した。
○便利グッズの紹介では、音声時計など音が出るグッズの時には生徒の反応がよかった。
○難しい言葉を使わず、生徒にも分かりやすい言葉を心がけた。
○自分の大変さを強調して話すより、前向きな日常生活の工夫を話す方が、子どもにはよいと思った。
○視覚障がいのみならず、誰にとっても「言葉が大切だ」ということを伝えた。

【アイマスク体験について】
○体験の際、生徒が「こわい」と騒ぎ始め、教師が注意してもきかなかった。その時私が「みんなも事故や病気で突然見えなくなることがあるんだよ！」と強く訴えた。その言葉が利いたのか、みんな静かに体験するようになった。
○従来のガイドヘルプ学習中心のアイマスク体験でなく、嗅覚、聴覚、味覚、触角の四感を生かす大切さを感じてもらうため、レモン（嗅覚、味覚）、タンバリン（聴覚）、うちわの風（触角）の工夫を取り入れた。

成果と課題

【成果】
○生徒の手紙から・・・「まちで見かけたら勇気を出して声をかけようと思った」「見えないことの大変さが分かった」
○授業終了後、ある男子生徒が「おせっかいと親切の違いは何ですか？」と質問してきた。「自分の希望したことをやってくれるのが親切、それ以上のことをしてしまうのがおせっかいだと思う」と答えた。その様子を見ていた教師から「その子は個人的な悩みを持っているらしい」と聞いた。今日の授業がその子の心に何かを訴えたのだと思う。

【課題】
○地元の市社協とより強く連携し、福祉教育に取り組む必要性を感じている。
○質疑応答の時間で一人も質問がなかった。思春期の子供が周囲の目を気にして自己表現する難しさを感じた。